

2018/07/01

「土台は大丈夫？」

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」（詩篇 119:71）

ショックやつらさ、それらを総称して苦しみと表現しましょう。苦しみは避けられないものですが、私たちは通常、苦しみに会うことを幸せとは感じません。どうすれば、苦しみに会ったことが幸せだと言えるようになるのでしょうか。

苦しみは、ドミノ倒しの最後のドミノのようなものです。倒れたドミノにはそれを押したドミノがあり、もとをたどれば必ず最初のきっかけがあります。苦しみも、目の前の出来事の背後には原因があります。それを見つけることで神の恵みが見えるようになるのです。ところが私たちは、苦しみを見つめることをしないで、回避しようとしてしまいしがちです。聖書が教える「忍耐」とは、もともと「逃げ出さない」という意味です。聖書は、苦しみは自分を見つめる良いチャンスだから、逃げ出さないでしっかり見つめなさいと教えているのです。

なぜつらいのか、苦しいのか、自分を見つめてさらに苦しみの先を探るなら、「苦しみに会ったことは、私にとって幸せでした」という御言葉の答えを見つけることができます。

■強い土台と弱い土台

「その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せたときも、しっかり建てられていたから、びくともしませんでした。聞いても実行しない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家は一ぺんに倒れてしまい、そのこわれ方はひどいものとなりました。」（ルカ 6:48-49）

土台がしっかりしている家は、洪水が来てもびくともしません。土台がない家はいくら見た目が立派でも倒れてしまいます。これは、神と私たちの関係を表したもので、神との関係がしっかりしているかどうかの人が土台です。悪口や陰口、仕事がうまくいかないことや、人間関係や金銭のトラブル等、私たちが傷ついたり落ち込んだり、苦しみを感ずる原因は様々ですが、もし土台がしっかりしていれば、それらの問題が起こっても動じることはありません。自分の外側で起こった出来事によって苦しみを感ずるのは、実は土台が弱かったということなのです。

地面の下にある土台は外から見てもわかりません。自分が苦しみを感じた時、土台がしっかりしていなかったのだと気づき、それを認めることができれば幸いです。そうすれば、その先に進むことができます。

■土台に気づく

私たちが苦しみを感じる原因は、出来事が原因なのではなく、すべての人の心の中に最初から存在している不安が原因です。これは、潜在意識とか無意識と呼ばれる心の領域です。聖書は、人が心に不安を抱えている原因を次のように説明しています。

人は、神によって、神に似せて造られました。ですから、人間は神と同じ本質を持っています。神の本質は「自由」です。神は、何ものにも拘束されません。たとえば、体が何ものにも拘束されないということは、病気もならないし、死ぬこともないということです。また、心が自由であるということは、誰のことも自由に愛することができるということです。しかし、今、人間にはこのような自由はありません。人の体は必ず滅びますし、私たちは、物質的なものであれ精神的なものであれ、何か見返りがなければ、人を愛することができません。

つまり、今私たちは、自由が奪われて制約された状態にあり、これが私たちを不安にさせているのです。

いったい何が私たちを制約したのでしょうか。それは死です。悪魔の仕業によって、人に死が入りこんだことによって、私たちは本来持っていた自由を奪われてしまいました。けれど、私たちの魂は、病むことも死ぬこともなく自由に人を愛せる本来の自分を知っています。そのため、現実にはそれを持っていないことに不安を感じているのです。

自由を知りながら、自由を手にしていない……これは、神を知りながら、神との関係がないということです。自由とは神であり、御霊であると聖書は教えます。クリスチャンである私たちは、意識において神を知ることができましたが、その関わりが深くないと、やはり不安を感じてしまいます。

結局のところ、私たちが感じる苦しみは、本体ではなく、不安から生じる影なのです。本体は、土台がしっかりしていないところに問題があるのであって、そのために様々な出来事で崩れてしまうのだと聖書は教えています。ですから、もしつらさを覚えたら、倒れた板を起すだけでなく、しっかりとした土台を作らなければ解決になりません。

私たちは、悪口を言われて苦しいと、相手に撤回させ謝罪させることで解決すると考えます。病気になったら、治療して回復することが問題解決であり、経済的に苦しいならお金を稼ぐことで解決しようと考えます。しかしそれでは、倒れた板を起こしただけで、土台は変わっていないのです。

土台が築かれていないために、また風が吹いたら倒れてしまう……、そういうことを繰り返したいのかとイエス様は問うておられるわけです。

人に腹を立てたり怒ったりする問題の原因は、相手ではなく自分の土台にあります。自分の土台に気づき、しっかりとした土台を築くことができるチャンスが、苦しみなのです。ですから、苦しみに会ったら、そこから逃げないで、しっかりと問題に向き合しましょう。それが本来の「忍耐」です。

■土台を築く

1. 神が言われたことを実行する

「なぜ、わたしを『主よ、主よ。』と呼びながら、わたしの言うことを行なわないのですか。わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行なう人たちがどんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。」（ルカ 6:46-47）

土台作りは、心を神に向けるところからスタートします。目に見えない神に心をむけるとは、神のことばを聞いて実行することです。

2. 罪に気づく

御言葉を実行しようとする、すぐに実行できない御言葉があることに気づきます。10分の1を神にささげること、返してもらったことを考えずに貸すこと、すべての人を愛すること、悪いことばを使わないことなど、神の律法をすべて完璧にできる人など一人もいません。しかも聖書は、一つでもできなかつたら、すべてできていないのと同じだと言います。神の律法は誰にも実行できないということが、神と人との関係を築くために重要なことなのです。

多くの人は、「自分は法律に違反するようなことはしていないから正しい人間だ」と言いますが、それはただ、苦しみから目を背けて、自分を見つめることを放棄しているにすぎません。本当に自分の心を見つめるなら、実は自分が罪深いことにすぐ気づくはずで

す。犯罪などのニュースを聞いた時、「なんてひどいことをするのか」と感じるのは、「自分はあいつとは違う」と思っているからです。しかし、決してそうではありません。たまたま自分がそのような環境になっただけであり、私たちは皆罪深く、すべての人が同じことをしてしまう可能性を持っています。

聖書は私たちに「さばくな」と教えていますが、「さばく」とは「区別する」ということです。自分は立派だと考え、人と自分を区別することが、さばくということです。しかし、自分が罪人だと気づくと、人をさばけなくなります。私たちは皆、神の前に罪人です。聖書では互いのことを兄弟姉妹と呼びますが、それはお互いに罪人であるという共通点によるものです。

神のことばをまじめに実行すると、そういうことが見えてくるのです。パウロはこのことに気づき、自分を罪人のかしらと呼びました。私たちも同じことに気づくことができれば幸いです。

「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにはありません。」（Iヨハネ 1:10）

「御言葉を実行しなさい」とは、「罪に気づきなさい」という意味です。もし自分の罪に気づかず、自分は悪くない、自分は大丈夫と言うなら、その人は神を敵とし、神を偽り者とす

るのであり、ただ自分勝手に生きているだけです。罪とは、神との間を邪魔する敵です。これが神と私たちの隔ての壁となり、私たちは自由でありながら、それが妨げられていて不安を覚えているわけです。

3. 罪を言い表す

「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（Iヨハネ 1:9）

いやしの作業の始まりは、「あなたの罪は赦された」という宣言なのです。ですから、神の前に罪を言い表すことが、神と人との関係のスタートになります。罪を言い表して祈ると、心が平安になります。この平安を通して、「こんな自分でも愛されている」と知り、不安がなくなっていくのです。このようにして神との関係が築かれることによって、私たちはだんだんと罪を犯さなくなっていくのです。

「私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の御前で弁護して下さる方があります。それは、義なるイエス・キリストです。」（Iヨハネ 2:1）

イエス・キリストは、神と人との関係は、医者と病人の関係だと言いました。病人は医者信頼して自分の病状を告白し、病気が癒されれば癒されるほど、医者との信頼関係は強まります。そして、どんな小さな症状でも治してくれることを期待して、さらに癒しを求めるようになるのです。

さらに、イエス・キリストは、弟子の足を洗い、「私が足を洗うのでなければ、あなたと私には何の関わりもない」と語っておられます。神は私たちの罪を赦し清めることで、私たちとの関わりを強くして下さるのです。

不安の原因を探れば、必ず自分の罪が見えてきます。そうしたら、そこから目を背けて逃げ出さずに、ただ神に「助けて」と祈りましょう。すると神は平安をくださいます。その時、自分が愛されていることがわかり、それを受け入れることでいやされ、土台が築かれていくのです。私たちの不安は、神の愛によって取り除かれていくのです。

御言葉を実行して、罪に気づき、神に罪を言い表して、癒され、神の赦しを受けることによって、神との関係が築かれます。そうすると、心に平安を得て、心の自由を取り戻すことができ、神を愛し、人を愛することができるようになるのです。

つらくなった時には、他のものでごまかしたり、回避しようとしたりしないことが重要です。それは罪です。不安・苦しみ・つらさを感じたら、神との関わりの中で解決しましょう。これが神の義を求めるといことです。目の前のもので解決しようとするのではなく、土台に目をやり、土台を築き直すために、御言葉を実行するなら、罪に気づきます。その罪を神

に差し出すなら、神に愛されている十字架が見えるようになり、それによって私たちは何があっても倒れない家を手にすることができるのです。